

京都大学	博士（地域研究）	氏名	直井 里予
論文題目	北部タイにおけるHIVをめぐる関係のダイナミクスの映像ドキュメンタリー制作ーリアリティ表象における映画作成者の視点ー		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本博士論文の目的は、現代の北タイ地域社会で生活する HIV 陽性者の日常的なリアリティを構成する（親密-公共圏的な）つながりの変容について、筆者自らが制作したドキュメンタリー映像とその制作（撮影・編集）および上映過程を事例に、(1)ドキュメンタリー映像の対象となった HIV をめぐる社会関係の変容について論じ、(2)ドキュメンタリー映像がその対象とした事象をいかにとらえうるかを自己再帰的に考察し、(3)ドキュメンタリー作品の制作の過程で生じる「撮る者ー撮られる者」の関係の動態を分析し、それが映像のリアリティにどのように関与するかを考察する。すなわち本論文は、北タイにおける HIV をめぐる関係の動態の議論と、それを映像で表象することに関わる議論との二重の構造を成している。本論文において「関係」というときに、そこには、HIV をめぐる現地の被写体間のみならず、撮影者と被写体の関係も包含されており、筆者は、その関係こそが映像におけるリアリズムを構成する不可欠な要素であると論じる。</p> <p>序章では、筆者の制作した『アンナの道（完全版）』と『いのちを紡ぐ』という 2 本のドキュメンタリー映像作品を紹介する。そして、本論文の課題である撮影・編集という制作過程を通じて作品が描く世界に、撮影者の視点がいかに関与しているかという問題を提起する。</p> <p>第 1 章では、映像論の枠組みを提示する。具体的には、社会的現実の捉え方、民族誌的表象と映像表象をめぐる問題に関して、文化人類学や社会学、および映像論における既存の議論を取り上げて、本論における視点の関与に関わる課題を論じる。</p> <p>第 2 章は、HIV をめぐる関係の動態に関する先行研究を考察する。まず、HIV をめぐる社会関係について先行研究を概観し、次に HIV がどのように表象されてきたのかを論じ、これまでの研究において、学術論文と映像は別個のアプローチとみなされてきたこと、そして、関係の変容過程を日常の視点から論じる研究の不在を指摘する。</p> <p>第 3 章では、実際の映像制作を通して描いた事象について考察している。北タイにおける一人の HIV 陽性者女性の日常生活に焦点を当てた映画『アンナの道（完全版）』を通して、HIV をめぐる様々な関係（主人公をめぐる親子と夫婦、エイズ孤児、陽性者自助グループ、村人などとの関係）の変容と新たな関係の構築過程をたどり考察する。調査地の P 県 C 郡では調査を開始した 2000 年当初エイズに対する知識は広まりつつあるものの、偏見は未だ根強く残っていた。しかし、HIV 陽性となり、偏見の対象となることを怖れて家にこもっていた陽性者らが、デイケアセンターでの出会いを機に、陽性者同士、新たな関係を構築し、村人とも関係を築き始めた。この一連の過程が考察の一つの中心である。さらに、HIV 問題の長期化と 2003 年以降の抗 HIV 薬の浸透、そしてタイの経済成長により変容した家族（親子、夫婦、祖父母）の役割とその関係を考察し、エイズ孤児と HIV 陽性者の女性が、「病縁」を通し、新たに親密な関係を形成してきたことを示す。</p> <p>第 4 章では、『いのちを紡ぐ』において映像化した HIV 陽性者の日常生活実践や彼女らが</p>			

関わるエイズ・デイケアセンターにおけるケアを通じた「協働」や、自助グループの活動が公共空間を形成していく過程を描いている。その際、病院の管轄下でない別の自律型の自助グループがその活動を広げつつあることをも論じている。そして、この過程で2つのグループが異なる結果に至った要因として次の3点を指摘している。①HIV陽性者の自律を促すための生活空間のあり様、②公的支援と民間など外部による複合的支援体制、③公に対する私の関係が緊密でありながらゆるやかで流動的であることの3点である。この章の結論として、自助グループが関係を持続し展開していくためには、HIV陽性者が日常生活における共同作業や会話を通してネットワークを構築できるような生活の土台、つまり生活空間の創出が重要であることを述べる。

第5章では、「HIV感染をめぐる関係」を主題に据えた2本のドキュメンタリー映像作品を、改めて分析者の観点から考察し、撮影者の視点がどのように映像表象（作品）に関与し、カメラはその関係をいかにリアリティを持って捉えることができるのかという問題を自己再帰的に考察する。そして、(1)ドキュメンタリー映像におけるリアリティとは、現実には起こっていることを表象するのみではなく、撮影と編集を通して構成される現実であること、そして、(2)ドキュメンタリー映像は、一般に客観的視点が重要だとみなされる傾向があるが、作り手の主観的な視点が不可避に関与し、撮影者と撮影対象者の相互関係によってつくられるものであることを論じる。

結論では、本論文の議論を総括したうえで、次の点を指摘する。第一に、映像を撮ることは、生きた人と人の関係に深甚な影響を与えずにはおかないものであること。第二に、時間軸に沿って進展する出来事を捉え、その時間と空間を再構築することにより制作過程で撮影者の視点が映像の作り出す現実に大きく関与していること。そして、本論文では、HIV感染をめぐる関係を撮影・編集する際に、そこに現地の被写体間の関係のみならず、撮影者と被写体の関係も関与しており、その関係こそが映像におけるリアリズムの不可欠な要素であると結論する。そして、本論において映像ドキュメンタリーを作成者として自己再帰的に分析する手法を採用することで、作成者の立ち位置などを含めた視点の変容を明らかにし、映像における現実がどのように構成されているのかを明らかにしたと結ぶ。